

指定介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者にとって

「お迎えを待つ」ということ

— 高齢者が語る end-of-life から —

牛田 貴子¹⁾ 藤巻 尚美¹⁾ 流石ゆり子¹⁾

要 旨

本研究の目的は、終の棲家として指定介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者が、日常的に表現する「お迎えを待つ」とは何かを探ることである。75才以上の高齢者で研究の同意が得られた13名に、面接を実施した。逐語録から死を示す言葉を中心にしたまとまり部分45カ所を選び出し、意味上の要約と関連により質的に分析した。これにより、「お迎えを待つという日常の心境」「お迎えを待つ心境に至る基盤」「家族に期待する」「自分を大切にする」「人を気遣う」「自尊心の喪失」「生活史の一部に位置づけなおす」7つの中グループを抽出し、施設で最期を迎える意思決定をした後期高齢者の「お迎えを待つ」というストーリーラインを描いた。現状をどのように意味づけて生活していくのかという点が、お迎えの待ち方に影響を及ぼすことが示唆された。

キーワード：end-of-life、お迎え、死の準備、後期高齢者、指定介護老人福祉施設

I. 序論

高齢者が最期を迎える場は、家族背景や高齢者の意思及びその時々の健康（生活機能）状態などにより多様化し、指定介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）、介護老人保健施設、認知症対応型共同生活介護（グループホーム）などで漸増傾向にある。中でも特別養護老人ホームは、2000年の介護保険法施行により措置制度が原則的に廃止され、指定介護老人福祉施設として家庭復帰をめざす施設となったが、利用対象を「身体上、精神上の著しい障害のために居宅で生活を継続することが困難な要介護者」¹⁾と規定しており、介護保険施行以前からの“終の棲家”としての特徴を色濃く残している。

さらに2006年4月の改訂介護保険制度の施行により、介護報酬・指定基準等が見直され、指定介護老人福祉施設における「重症化対応加算」が

創設された。これに伴い、指定介護老人福祉施設における「看取り」のあり方が、大きく取り上げられるようになった。

指定介護老人福祉施設での「看取り」は、これまで終末期がん患者を中心に組み込まれてきた「ターミナルケア」とは、基本的に異なるものである。高齢者の終末期について使われる「end-of-life」は、1997年以降、米国老年医学会により提唱されるようになった言葉だが、その定義や標準化されたケアのあり方などは、まだ研究の途上でありこの解明が急務とされている。日本老年医学会における立場表明²⁾でも、高齢者の終末期に関しては、高齢者の多様な病態や個人差を考慮して終末期を病態別に定義することや、余命予測は困難で具体的な期間の規定を設けることはできないとしている。

これらの状況の中で「看取り」に関する体制づ

(所 属)

1) 山梨県立大学看護学部

(専攻分野)

老年看護学

くりの検討は、利用する高齢者の意向を十分に反映したものでなければならず、どのように高齢者が自らの死について考えているのか、その考えに基づいてどのような生活を望んでいるのかを把握する必要がある。

II. 文献検討

1. 指定介護老人福祉施設における看取りの現状

竹迫³⁾によると2001年9月の1ヶ月間に施設で死亡退所した人の全国推計値は1,816人で、このうち44.8%にあたる814人が施設内死亡であった。また2003年9月の同調査では、死亡退所が2,150人で、うち36.1%の778人が施設内死亡であった。医療経済研究機構の2002年の全国調査⁴⁾では、過去1年間の死亡退所は、退所者全体の76.7%にあたり、死亡退所者の37.2%が施設内死亡であった。入所者本人や家族から施設内で亡くなりたいとの希望があった場合、約7割の施設が「原則として受け入れる」という回答だが、常勤医師がいる施設は5%で、93.9%が内科嘱託医であった。また看護職員が夜勤体制に含まれているのは5.2%で、オンコール体制が54.8%であった。

本県の状況については、筆者ら⁵⁾が2004年に調査している。看取りの基本方針は「施設での看取りも可能」が63.5%で、実際にどのようなケースが多いかを尋ねると「そのまま施設内で生活し、看取る」のは37.5%であった。

2. 指定介護老人福祉施設における「看取りに関する指針」

2006年4月の改訂介護保険制度の施行により、介護報酬・指定基準等が見直され⁶⁾、その基本方針の一つである「中重度者への支援強化」の一環として、指定介護老人福祉施設における「重症化対応加算」が創設された。これは看護体制の確保および「看取り」実施など、一定の要件を満たした場合に加算するというものであり、これを積極的に取り入れようとする動きが見られている⁷⁾。

この「重度化対応加算」要件に、「看取りに関

する指針」の策定がある。具体的な内容としては、当該施設の看取りに関する考え方、終末期の経過（時期、プロセス等）の考え方、施設において看取りに際して行いうる医療行為の選択肢、医師や医療機関との連携体制、本人および家族との話し合いや同意、意思確認の方法、職員の具体的対応策等がある。

これらの内容項目は、筆者らが実施した県内調査研究⁸⁾に含まれる内容であり、前述のような看取りの現状の中で看護師達は、「終末期の判断基準とケア方針が未確立」「施設における終末期ケア体制の未整備」「夜間および終末期ケア体制の未整備」に困難を感じていた。今回「重度化対応加算」によって浮上した「看取りに関する指針」だが、指定介護老人福祉施設でのケアの特徴から考えて、各施設での早急な策定が望まれる。

3. 指定介護老人福祉施設で生活する高齢者に焦点をあてた研究

施設で勤務する看護職、介護職、相談員、施設長等を対象とした調査に比べ、高齢者本人を対象とした調査研究は多くない。介護保険施設の中でも、介護老人保健施設に入所している高齢者を対象とした面接調査⁹⁾¹⁰⁾を散見するが、“終の棲み家”ともなりうる、指定介護老人福祉施設で生活している高齢者を対象とした研究はほとんどない。松岡¹¹⁾は指定介護老人福祉施設と介護老人保健施設に入所している高齢者を混在して、入所生活の受容過程について質的に分析し、介護老人保健施設の場合には「施設移動の心配」という指定介護老人福祉施設とは違うカテゴリーを追加していた。しかし、指定介護老人福祉施設で暮らす高齢者の心中は、入所生活への適応だけでなく、人生を終える場としてその場に身を置き続けるという「その後」が重要であり、単に生活の場の移動がないため安心や安定を得たとは言い切れない複雑さがある¹²⁾と考える。

75歳以上の後期高齢者の場合、5年後、10年後、20年後といった自らの将来設計には「死をどこでどのように迎えるのか」という話題は避けて通れない。高齢者が日常的に表現する「お迎えを待つ」

という言葉は、指定介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者にとっても、頻繁に会話に出てくる言葉である。“終の棲家”として指定介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者が、どのように自らの死を迎えたいと考えているのか。「お迎えを待つ」という言葉をキーワードとして明らかにすることは、高齢者自身が納得できるend-of-life careのあり方に示唆を与えるものであると考えた。

Ⅲ. 目的

本研究の目的は、指定介護老人福祉施設を“終の棲家”として暮らす後期高齢者が日常的に表現する「お迎えを待つ」とは何かを探ることにより、どのように自らの死を迎えたいと考えているのかを明らかにすることである。

Ⅳ. 用語の定義

「お迎えを待つ」とは、指定介護老人福祉施設で生活しているという現実の延長線上として、死の迎え方をも視野に入れて、今後どのように生活をしたのかに関する高齢者自身の考え方や行動とした。

またend-of-lifeとは、日本老年医学会の定義¹²⁾を一部改変し、「疾患と老化の進行により、心身諸機能が低下し、その時代に可能な最前の治療により病状の阻止が期待できなくなり、近い将来の死が不可避となった状態をいう」とした。

Ⅴ. 方法

本研究は、2005年度に「高齢者の終末期 (end-of-life) のケア研究会」で取り組んだ「高齢者の終末期 (end-of-life) のケアに関する研究 (Part II)」¹³⁾の結果から、研究会メンバーの了解を得て死に関する本人の語りの部分を分析、検討したものである。

1. 情報提供者の選択と手順 (表1参照)

情報提供者は指定介護老人福祉施設に入所し入所後半年以上経過している75才以上の高齢者で、ここを“終の棲家”として本人が了解している日常会話が可能者である。施設長の協力許可を文書で得た上で、各施設の看護長もしくは介護長を

ゲートキーパーにして情報提供候補者を選択し、ゲートキーパーが情報提供候補者に研究者を紹介後、研究者から研究参加依頼をした。

13名から研究参加への同意を得た。年齢は75～96歳で、85才以上が7名。13名中男性1名、女性12名であった。

また施設が限定されることによる結果の「一般化への可能性の制限」を減らし、典型性を得るために、複数の施設を場として選定した結果、情報提供者となった高齢者が入所する施設は5カ所であった。

2. 調査の手順

調査に先立ち、研究者を含む調査者を対象とした面接技術や質的研究に関する勉強会を2回 (各回約120分) 実施し、できるだけ有効なデータ収集ができるように準備した。

調査者は、15年以上の看護師経験があり、うち3年以上現在勤務する高齢者施設で働く看護師と、老年看護学の教員の計11名である。バイアスを除くため、現在勤務しているもしくは勤務したことのある指定介護老人福祉施設とは別の施設での面接を担当した。

2005年12月に高齢者が居住する施設にて、面接ガイドをきっかけとした約40分の半構造的面接を行った。面接ガイドは面接時の注意点と質問項目から成っている。大項目は「現在の施設生活に関する思い」「施設生活の今後についての思い」の2つで、それぞれについて感情、経験、知識について引き出せる複数の質問例が示してあり、面接者が状況に応じて被面接者の自由な語りを引き出すのに活用できるように作成した。

また、面接とは別に、対象者の基本属性はカルテ及びスタッフより情報収集した。

3. データ分析

面接時のメモと録音テープから逐語録を作成した。分析に先立ち、研究者がそのデータの文脈をより理解するために事例毎に約90分、面接した調査者が逐語録を用いて状況を細く説明し、意見交換した。研究者3名でくり返し逐語録を読み、

死を示す言葉や内容を含む部分を文脈ごとに選出した。

分析は変則KJ法¹⁴⁾を用いた。変則KJ法とは、川喜田のKJ法の変法としてつくられたものではなく、日本にグランデッドセオリーを最初に紹介した訳者の1人である水野氏が、独自に開発した方法である。カード整理法としての共通点もあるが、データの中から意味上まとまりのありそうな部分を30～40選択する、可能な限り内容に忠実な要約、意味を重視した関連の有無によるふりわけ、何に注目するか要素を絞り込んだストーリーの作り上げなど、KJ法とは違ったグループ編成の論理を持つ。この作業を研究者3名で討論しながらすすめ、関連する内容ごとにグループ化して命名し、構成する関連グループを作成していった。さらにこの関連グループを用いたストーリーラインを作成し、図式化した。

4. 真実性を保証するための方略

この質的研究の真実性を保証するための方略として、①調査者は情報提供者である高齢者にインタビュー中又は直後にチェックを受けること、②研究者は分析結果を調査者に示してチェックを受けること、③3人の研究者が分析過程を通して関わり、研究者のトライアンギュレーションをすることを実施した。

5. 情報提供者への倫理的配慮

まず研究協力施設責任者に対して、調査の概要を説明し、調査協力依頼を行った。施設責任者の承諾が得られた後、看護長に情報提供者の推薦を依頼し、この情報提供候補者に対して看護長から調査の簡単な説明と口頭での内諾確認を依頼した。内諾が得られた高齢者に対し、研究者が直接、調査協力の依頼を口頭・文書で説明し、同意する場合は同意書を取り交わした。説明内容は、①協力に同意しなくても何の不利益も被らないこと、②面接中の中断や発言の拒否は自由であること、③録音は厳重に管理し研究以外の目的では使用しないこと、④面接で得られた内容は本研究以外の目的では使用しないこと、⑤個人や施設が特定でき

ないよう配慮し、個人情報には十分配慮すること、⑥研究終了後、個人記録は確実な方法で破棄すること、⑦対象者の健康状態や疲労度に配慮し、急変した場合は面接を中止し、対象者の安全を最優先するなどである。

面接は、同室者のいない居室または別室にて、情報提供者の都合の良い時間に実施した。

尚、本研究は山梨県立看護大学研究倫理審査委員会の審査を受けて承認されたものである。

VI. 知見/結果と考察

話の流れの中で死に関する話に至るきっかけとなった調査者の言葉と、本人が語る死を示す言葉を、表1に示した。話題のきっかけが特定できず、何となく流れの中でという場合や、本人から唐突に話し始めたという場合もあるが、面接ガイドの質問例にあった「将来」「この先」「何歳ぐらいまで」という言葉が多かった。また本人が語る死を示す言葉には、「逝く」「墓」「葬式」「迎え」「生まれ変わる」「寿命」など様々なものがあつた。これらの言葉を中心に、研究者3名の検討により、「意味上まとまりのありそうな部分」を合意で選択した。この「意味上まとまりのありそうな部分」の1まとまりを1場面として数えると、選択したのは45場面であった。情報提供者一人あたりの場面数は、9場面が最多であり、1場面が4名であった。

1. 指定介護老人福祉施設を“終の棲家”として暮らす後期高齢者が日常的に表現する死のとなえ方

情報提供者13名の中には、「早く死にたい」という言葉で語る高齢者もいたが、これは積極的な自殺を意味していない。また逆に「死にたくない」「もっと長生きをしたい」という文脈も全くなかった。生死は自分でどうこうできるものではなく、神や仏に代表される超越した何かによって定められるものであり、人間は受動的にそれを「お迎え」し、天命を「待つ」ものであるという[お迎えを待つ]という姿勢が、それぞれの文脈の中から伺えた。

表1 情報提供者とデータの背景

	年齢・性	入所施設	場面数	話題のきっかけとなった調査者の言葉	本人が語る死を示す言葉
Aさん	94 女性	a	8	(不明)、「何でもつたいないと思う・・・」「やっぱお家とは違うっていうのがありますよね」「あと不安に思うような・・・」	献体、死ぬ、どうせ生きていくなら、先、行く先、死ぬこと、死んだ後、今後、始末をつける、神様・仏様、いつまでも生きること
Bさん	86 女性	a	6	「一生ここにようかなって考えて・・・」「お舅さんも結構長く生きられたのですか?」「いつまでぐらいは元気でいたい」と(不明)「元気なうちにお迎えが来ればいいかなって」	一生、死ぬまで、お葬式、死んでも、迎えが来る、逝きたい、お迎え、仏様と神様、生まれ変わり、お墓、逝く、見届ける、死んで
Cさん	75 女性	b	4	(不明)、(不明)、「まだまだお若い」(不明)	将来、なんぼでも生きてちゃあ困る、死ぬ、安楽死、楽になりたい、残してやりたい
Dさん	78 女性	c	1	「今、心配だなんて思っていることがあります?」	亡くなった、葬儀場、寿命
Eさん	78 女性	b	1	「年をとるのって良いですよ」	逝く、最期、
Fさん	82 女性	d	1	「いろいろ気に病んでも・・・」	死にたい、
Gさん	96 男性	a	3	「どんな風にね、この先を過ぎていきたいなっていうふうに考えておいでですか?」「年をとるっていうのはどういうことですか?」	亡くなる、死ぬ、生まれ変わる、仏教、この世
Hさん	82 女性	a	4	「楽しいって感じですか?」「この先のことをいろいろ考えたりしますか?」「月参りをされているとか、いろいろされるじゃないですかね」	死ぬ、死んだら、お墓参り、お墓、埋めてもらう、亡くなる、お葬式、亡くなって
Iさん	89 女性	c	1	「これから自分の中で何歳くらいまで生きたいなあって思っています?」	えいかげんにゃあ逝きたい
Jさん	83 女性	e	9	「これから先はどんな風に生活したいと思ってるっしゃいますか?」「何歳くらいまで元気でいたいですかね、ご自身は何処で最期を迎えたいって思ってるっしゃいます?、」(不明)	向こうへ逝く、楽になりたい、亡くなった、楽に逝く、焼く、お墓、覚悟でいる、生きていたって、楽にさせて
Kさん	90 女性	d	3	「将来、どんな風にして生活をしていきたいなあとと思う?」「Kさんがね、この施設でね、一生懸命ね、生きてる、生活をしているっていうのがね」	お迎え、死んどー、死ぐ、死ぎたい、あとをとる
Lさん	89 女性	e	2	「お姉さんの年齢は越して、元気でないといいかね」	送ってもらう、逝く、
Mさん	91 女性	c	2	「今もお元気だけど、何歳くらいまで元気で過ごして・・・」	これでもうせいせい

* 不明：きっかけが特定できない。何となく流れで、本人から唐突に話し始めたなどを含む

2. 指定介護老人福祉施設を“終の棲家”として暮らす後期高齢者が日常的に表現する「お迎えを待つ」を構成する関連中グループ

抽出した45場面のそれぞれに対して、語られた文脈に沿って意味上の要約を行って一行見出しを作成し、カードに書き込んだ。この45の一行見出しのカードを1枚選び、そのカードと他のカードを順に一枚ずつ比較して「何を意味しているのか」という観点から、「関連している」または「関連していない」の2つに振り分ける作業を繰り返し、13の小グループを作成した。さらにこの13小グループの意味内容を記入したカードを作成し、同様の意味内容による関連の振り分け作業をした結果、7つの中グループを作成した。この分析結果を表2に示す。以下、関連中グループごとに特徴的なデータの一部を示して説明する。尚、関連中グループを【 】, 関連小グループを〔 〕で示す。

1) 【お迎えを待つという日常の心境】

自分の手の中にない生死の線引きではあるが、これが不条理なことではなく、あたりまえのこととして受け入れられ、ごく普通にありふれた日常生活

活の一部として淡々と語られていた。

また、「そろそろ私も」という意味を含む言葉が複数の高齢者から語られた。これは今生きている自分は、同世代を生きてきた人々の多くから「取り残された」こととしても意味づけられ、現世の生きにくさからの回避だけでなく、自分も早く皆と同じようになりたいという願いを表している。

どうせ逝くのなら〔死ぬ時を苦しまないで迎えたい〕と思う。「楽に死にたい」という言葉も、積極的な死を望むわけではなく、苦しまないで死ねたらいいなあとという願いを示したものである。この願いの背景には、身近な知人友人が順に亡くなっていく中で、様々な死を見聞きし自分の姿を重ねることがあった。「～であればいい」といつどのように最期を迎えたいのかを思ってみても、「仕方がない」とままならないことを承知の上で、それでもできたらそうあって欲しいと思いながら、ここが“終の棲家”と了解して日々の生活を重ねている。

【事例B】 私もう86でしょ。ぼつぼつ迎えに来てくれるのかなあって。うちの死んだ人、旦那に早く迎えにこいって。いつでも、いつでもいいんで早めに

表2 指定介護老人福祉施設を“終の棲家”として暮らす後期高齢者が日常的に表現する「お迎えを待つ」を構成する関連中グループ

関連中グループ	関連小グループ	事例	一行見出し
お迎えを待つという日常の心境	a. お迎えがくるのを待っている	I	長生きしている人もいるが、私はえーかげんに逝きたいと思う
		B	仏様と神様が決めて、早く逝くのが一番の願い
		J	楽に早く逝った人がうらやましい
		M	面倒を見てくれる甥や姪よりも長生きして、後に残っては困る
		K	早くお迎えが来なくちゃ困ると思うが、丈夫だから仕方がない
	b. 死ぬ時を苦しめないで迎えたい	B	元気なうちにお迎えが来ればいい
		C	長く患っていれば、楽に死にたいと思う
お迎えを待つ心境に至る基盤	c. もう十分に生きて思い残すことはない	K	苦しんだり、恐ろしい思いをしながら死んだ人を見ているので、眠るように死にたい
		J	私は今逝ってもいい。
		A	子ども達も自立して後悔はないからいつ死んでもいい
	d. もう死ぬ心の準備はできている	O	もうこれだけ生きたので十分です
A		行く先はわかっているから死ぬことに関しては怖くない。	
家族に期待する	e. 幸せだったねと言われるような看取りを家族にして欲しい	J	子どもにも施設にも、一日もやっかひにならんように、いつでも向こうへ行ける心づもりがある
		E	子どもや孫、みんなに囲まれ、「おばあさんは幸せだね」と言われるような最期がいい
自分を大切に	g. 生きている間は自分で計画的に生きる	J	家には帰らなくていいから、せめて子どもや孫には、葬式を出してもらいたい
		O	先のことは考えないで、今のことだけ考えている
		A	どうせ生きていくなら、痛くないように、楽しく、子どもの厄介にならないように生きていきたい
		D	入所していても、寿命がある限りは、できる仕事はしたい
		B	お金があれば死ぬまで施設にいたい、高いのでいろいろ考えている
		G	生まれ変わると言うことは信じないので、今は二度とない
	h. 死んでからのことを自分で段取りをつけておく	A	自分で電話して子どもには内緒で検体を申し込み、後で伝えた
		A	私が死んだら私の好きな写真は誰も見ないから一緒に焼いてもらおうと思う
		A	何年経ったら死ぬかがわかれば、それなりに始末をつけたい
		C	死んでから私の日記を見られても恥ずかしくないように、日記を書いている
		H	施設に死ぬまで生活して、死んだら施設のお墓に入れて欲しい
		C	貯めたお金は自分たちに使うよりも、親らしく息子達に残してやりたい
		B	検体を申し込んだので、葬式代は心配いらないと息子に言った
		H	私が死んだら面倒を見ない甥にお金を取られるから、施設に寄付したい
		i. 私には人に左右されない自分なりの価値観がある	G
A	家族が写真をもってこられても、私が死んでしまうと誰も見る人がいないからここにおくのはもったいない		
人を気遣う	j. 家族に心配や迷惑をかけたくない	K	自分が病むと、丈夫でない息子が毎日来なくちゃならないから、あっという間に死にたい
		B	子どもに迷惑かけちゃかわいそうだから、いつでもいいんで早めに逝きたい
		G	家族に心配をさせたくないから、苦しまずに楽に死にたい
	k. 私は「早く逝きたい」が、周囲に悪くして言えない	B	私が姉さんより先に逝けば、姉さんは私の心配をしなくてよくなる
		M	「早く逝った方がいい」なんて、皆さんが一生懸命ケアしてくれるので言えないと思う
		J	やっかひにならんように、楽に逝きたいなんて言っではいけない
		J	子どもにも心配させちゃ悪いから、早く逝きたいという思いは、自分が慰めて自分の中にしまっている
自尊心の喪失	l. 役に立てない私、自分のこともできなくなった私は、生きている甲斐がない	F	早く死にたいな、なんて息子の前で言うとかわいそうだから、おもてに出さない
		J	やっかひにならないように楽に逝きたいなんて話をすれば、子どもがかわいそうだ
		J	生きていたって役に立たないから、早く楽にさせて欲しい
生活史の一部に位置づけなおす	m. 施設で死ぬこと、葬儀、埋葬することは、私なりの生活史だ	C	自由がきかない身体でいつまでも生きてちゃ困る
		A	自分の好きなようにできなくなってからも生きることは嫌な気がする
		H	お葬式は家でするものかと思ってたが、妹に「施設で葬式をしたら」と言われ、ああそうかと思った
		H	私のようにお嫁に行かない人や後妻に行った人は、家のお墓に入れないこともある
J	ここに入るんじゃあ、ここで最期を迎えるしかないよ、施設に入る前から、覚悟している		

逝きたいと思っているんですよ。キュッと逝きたいと思って・・・それを願っているんですけど、それもダメらしい・・・仏様と神様がね。そこまではわがまま言っちゃあね。

事例K 私はあんまり苦しみたかあねえよお。寝て一て、「あれ、ばあちゃん死んだるけ」っちゅー様に、死にたいよ。この年になってから、あんまり苦しんだり、恐ろしい思いはしたくないよー・・・そういう人があったですよ。えらくて、えらくて・・・あんな思いはしたくないよー。眠るように死ぎたいよー。

2) 【お迎えを待つ心境に至る基盤】

〔もう十分に生きて思い残すことはない〕を最も端的に表していたのは、甲州弁の「もう、せいせい」という言葉である。否定的にもういらぬというのではなく、もう満ち足りていてこれ以上は必要ないことを意味する。また〔もう死ぬ心の準備はできている〕は、不全感や不満足、心残りなどの様々な状況があったとしても、自分なりに気持ちの整理をつけた状況を示す。矛盾を含みながらも腹をくくったといった心理的な安定がある。

事例O 今91歳で。もうこれでせいせいです。

(まだまだなんて、) とんでもない・・・先なんて考えることはないですね。

事例A 死ぬことに関しては怖くないんです、私は。いつ死んでもいいと思っています。いい人生でもないんですけどね。子どもたちもそれぞれになつてね、いるから・・・どうせ生きていくんなら痛くないように楽しく生きたいと思うですよ。先はわかっていますから。行く先はわかっていますからね。この間も般若心経を、あの、お話し聞いたです。死んだ後どうなりますかってね(尋ねたら)、それはわかりませんって、言っていましたけどね。

3) 【家族に期待する】

〔幸せだったねと言われるような看取りを家族にして欲しい〕〔死んだらせめて家族にこれだけはして欲しい〕の両方とも、自分が死んだ時を仮定しての内容である。死んでからのことは、自分ではどうすることもできない。どんなに家族に約束していても、その約束が履行されたかどうかの確認はできない。不確実性の中での要望であり、そ

の切実さや実現可能性の幅が大きく、これまでの複雑な家族の歴史が背景にある。夢に描く家族の別れの場面をイメージするという文脈からは、実現可能性の検討は脇に置いて語るという高齢者もあった。「家族には期待していないが、せめてこれだけはして欲しい」という要望は、明るい前向きな、夢が膨らむという類の期待ではなく、家族の状況を十分に認識した上で、できれば成就したいささやかな願いである。

事例E 9人の子どもが全部枕元に集まって「わかるか」って言ったら「わかる」って、手をこういう風に。最期までこれをやってね・・・「おばあさんは幸せだねえ」って言ったら、(父が)「あれでいいんだよ」って、うん。(私も) こんな最期ができればいい、うふふ・・・、そうそう。

事例J 結局、ここに置いてもらうじゃあ、ここでしかないですかね。もしここでもって(死ぬこと)になったら・・・「俺は親戚も何にもねえから、今の従兄弟とあんた達の孫に送ってもらえばいいよ」って言っちゃあいる。もう、ここに入る前からそういう覚悟でいるです。

4) 【自分を大切にする】

この関連中グループは、最も多くの一行見出しを含む。〔生きている間は自分で計画的に生きる〕〔死んでからのことを自分で段取りをつけておく〕〔私には人に左右されない自分なりの価値観がある〕は、いずれも死を迎えるまでのある程度の期間限定の中で、最期まで自分らしく生活したいという意味と行動を示す。人任せに生きていくのではなく、選択権や決定権は自分にあり、これは日常生活の細部にまで及ぶ。

事例D 寿命でね。何とも言えないけどね。生きている以上はね、こういうたみもんとかね。何とかね、さしてくれるからありがたいと思っています・・・こうして、あの、毎日仕事をしているです。

事例A 私が死んでしまうと誰も(写真を)見る人がいないでしょ。だから、これ入れてもらおうと思うの、(棺の)中へ。一緒に焼いて・・・私の好きな写真も焼いてもらうの・・・あと何年たったら死にますよってことがわかるといいですけどね。そうすれば、私、それなりに始末をつけるんですけどね。私

わがままだから、自分のやりたいようにやりたいって
ちゅうわけです。

事例C 日記を書いて眺めてね、嫁さんや息子に
将来ね、おじいさん（故人）にも見られても恥ずか
しくないように書いてる。誰ん見てもね「変なこと
が書いてあるー」って言われちゃ、やーだかんね。そ
れでも自分で満足して。楽しいんですよ。

5) 【人を気遣う】

この関連中グループは、死を迎えるまでのある
程度の期間限定の中で、他者との関係性の中でど
う生活したいかという意思と行動を示す。他者に
委ねたり、一方的に自らの主張を取り下げたりし
ているのではなく、家族や職員、同室者といった
自分の周囲の人々のことも考え、他者との関係性
の持ち方を勘案した結果「家族に心配や迷惑をか
けたくない」[私は『早く逝きたい』が、周囲に
悪くて言えない]が生じる。

あきらめや、不満といった否定的な感情とも捉
えられるが、語りの中では、相手に向けた温かい
まなざしも感じさせた。これまでの関係性を基盤
とした感謝や相手を大切にしたいという思いから
生じる気遣いである。

事例G 亡くなるまではね、苦しまなくて、なるべ
く。楽に死んでいきたいと思えますね。苦しんだり
ね、家族の者を心配させるのを・・・させないと思っ
ているんですがね。これ、自分の自由になりませ
んからね。

事例F そう気に病んでも仕方ないからね。そう
だな、早く死にたいな、なんて、ほんなこと息子の前
で言うとかわいそうだからね。自分だけで承知して
います。

6) 【自尊心の喪失】

[役に立てない私、自分のこともできなくなっ
た私は、生きている甲斐がない]は、老いや病気、
家族関係などの思うようにいかない現実に対して、
自らを否定的に意味づけている。

事例C 身体は悪いけどね。病気がしたうえに、息
子やおじいさんに迷惑して（迷惑かけて）。今のとこ
ろは病気が落ち着いてるからねえ。これ以上は病み
たくても病めんでしょう。内蔵がいいだから（お迎
えが来なくて）困るじゃんねえ。こんな具合でなん

ぼでも生きてちゃあ困る。

事例J 早く私を楽にさしてください。本当。生
きていたって役にたたんじゃん。ほうでしょう。自
分でみててそう思う。他のし（人）はどうだか、私
は、そう思っています。

7) 【生活史の一部に位置づけなおす】

[施設で死ぬこと、葬儀や埋葬することは、私な
りの生活史だ]は、思うようにいかない現実があ
っても、それをありのままに受け入れ、別の意
味づけを附加している。「こういうこともあるん
だ」と気負いなく、淡々と語られた。これらは「開
き直り」や「抵抗」といった現実否定ではない。

事例H お葬式ちゅうもんは、あたしどものよ
うなお嫁にいかん人間は、実家ですもんかなあ
って思ったんですよ。・・・でも妹に「ここ（施設）で
お葬式して、お墓に入れてもらった方がいいよ」って
言われて・・・私も「ハッ」とそう思って。（ウンウン
なずいて）の方がいいんじゃないかと、言われてそ
う思いました・・・こう自分で決めたら、気分的に落ち
着いてね。

3. 施設で最期を迎える意思決定をした後期高齢 者が「お迎えを待つ」というストーリーライン

7つの関連中グループを中心に、「お迎えを待
つ」というストーリーを作り上げる段階にいたっ
て、この7つが複雑な時間軸で並ぶプロセスでは
表現しにくく、むしろ全員が「お迎えを待つ」と
いう心境にあるのに、その具体的な待ち方にバリ
エーションがあるのは何故だろうか疑問を持っ
た。つまり「単に手をこまねいてお迎えをひたす
らじっと待つ」という高齢者と、「お迎えの時まで
精一杯生きて待つ」という高齢者の違いは何だろ
うかという疑問である。これを際立たせるために、
7つの関連中グループをさらに、「お迎えを待つ」
という心境、「お迎え」の待ち方としての日常の過
ごし方、うまくいかない現実に対しての独自の意
味づけの3つに分類した。この3つの関連を中心
にしてストーリーラインを描き、図示した。

1) 「お迎えを待つ」という心境

自らの死について淡々と語る【お迎えを待つと
いう日常の心境】に至るには、[もう十分に生きて

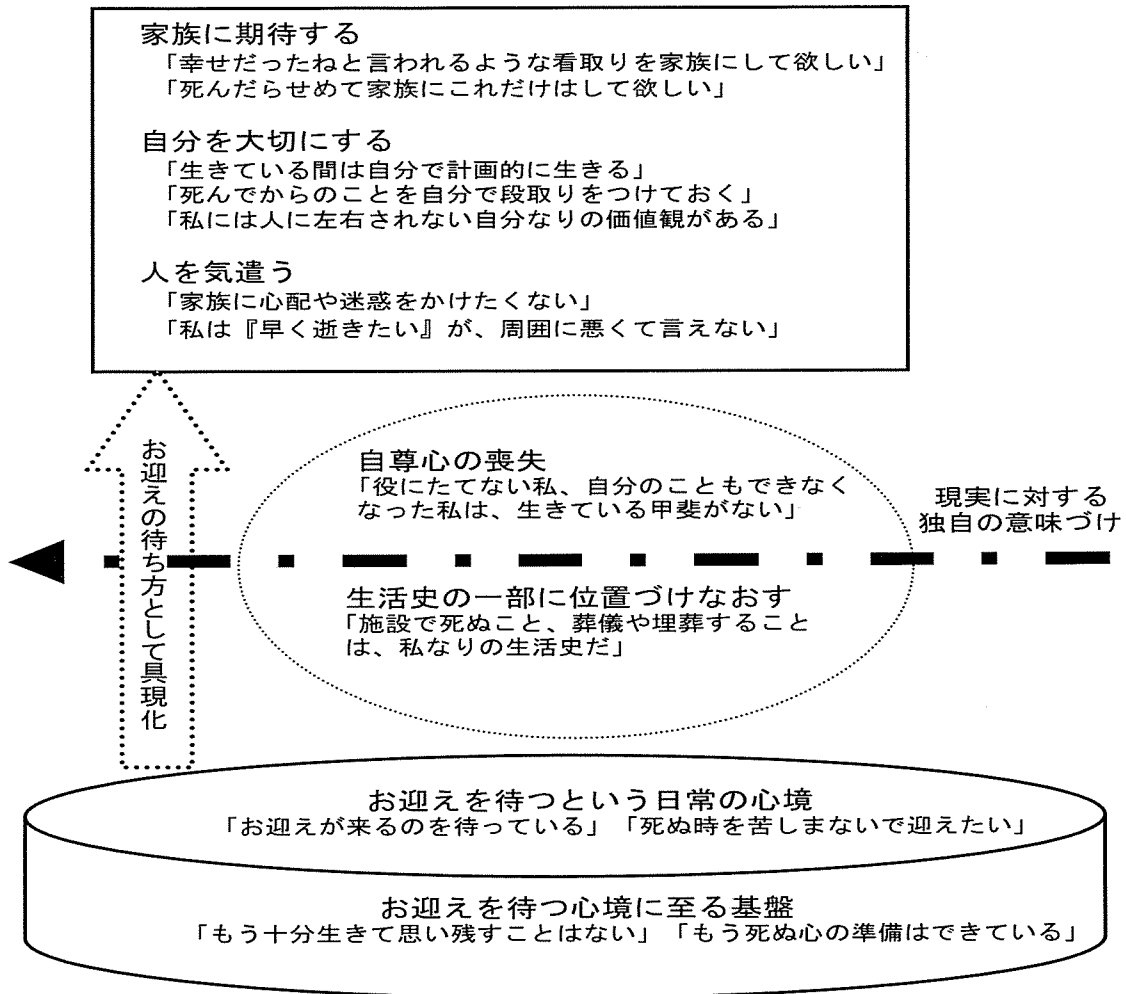


図 指定介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者にとって「お迎えを待つ」ということ

思い残すことはない][もう死ぬ心の準備はできている] という【お迎えを待つ心境に至る基盤】が必要である。施設入所のプロセスや生活を重ねていく中で、施設で最期を迎える意思決定をした後期高齢者は、「しかたがない」「こういう人もある」と様々な矛盾を含みつつ気持ちの整理をして、自分にはどうしてもできない「お迎え」の時を待っている。

2) 「お迎え」の待ち方としての日常の過ごし方

「お迎え」が来るまでの待ち方として、【家族に期待する】【自分を大切にする】【人を気遣う】がある。お迎えが来るまでの日常は、これら3つの強弱はありながらも、多くの高齢者の語りの中に複数存在していた。たとえば「家族に〇〇して欲しい」と願ってもそれがかなわない現状があり、ただただひたすらに家族に心配をかけないように

「お迎えを待つ」場合がある。ほとんど家族に期待することなく、心配をかけさせたくもなく、今を自分らしく生きたいと毎日をいろいろに楽しみながら過ごす場合もある。「お迎えを待つ」心境を具現化した日常の過ごし方は個人により様々である。

3) うまくいかない現実に対しての独自の意味づけ

「お迎えを待つ」日常では、どの高齢者も、思うようにはいかない現実を抱えている。「お迎え」の待ち方としての日常の過ごし方に大きく影響するのが、うまくいかない現実に対しての独自の意味づけである。老いや病い、家族関係などの現実の問題が生じて、それをどのように意味づけていくのかによって、お迎えの待ち方が違ってくる。

個人の抱える様々な問題を「役に立てない私、自分のこともできなくなった私は、生きている甲

斐がない] といった【自尊心の喪失】と意味づければ、残りの人生は肩身が狭く、ひたすらお迎えを待ちこがれるのみとなる。この場合【自分を大切にする】生活は弱くなるであろう。逆に[施設で死ぬこと、葬儀や埋葬することは、私なりの生活史だ]とこれまで自分が生きてきた延長上にこの先の過ごし方を位置づけ、それも自分の生活史の部分であると納得して【生活史の一部に位置づけなおす】ことができれば、穏やかに限られた時を自分らしく生き、より【自分を大切にする】傾向は維持される。

「現実に対する独自の意味づけ」のプロセスに、どのように看護師が関わっていくのが重要な援助となると考える。

VII. 結論

1. 指定介護老人福祉施設を“終の棲家”として意思決定した後期高齢者には、「お迎えを待つ」ことがごく普通にありふれた日常生活の一部であった。

2. 「お迎えを待つ」とは、「お迎えを待つという日常の心境」「お迎えを待つ心境に至る基盤」「家族に期待する」「自分を大切にする」「人を気遣う」「自尊心の喪失」「生活史の一部に位置づけなおす」の7つで構成されていた。

3. 「お迎えを待つ」というストーリーラインを描いたところ、「お迎えを待つという心境」をベースとした「お迎え」の待ち方は様々であった。これには、思うようにはいかない「現実に対する独自の意味づけ」が大きく影響していた。

4. その人らしいend-of-lifeを支援するためには、その人らしい「お迎え」の待ち方を具現化できる支援が重要である。そのためには、「現実に対する独自の意味づけ」に一步踏み込んだ援助が必要である。さらにこれをどのようにケアとして実現していくのか、今後の課題である。

なお、本研究の一部は日本老年看護学会第11回学術集会にて発表した。

謝辞

本研究に情報提供者として様々な思いを語っていただきました後期高齢者の皆様に心より感謝いたします。またデータ収集に際して調整をして頂いた指定介護老人福祉施設の施設長様、看護長様、スタッフの皆様、そして高齢者施設での豊富な看護経験を活かして、調査に携わって下さいました「高齢者の終末期 (end-of-life) のケア研究会」のメンバーに感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 「指定介護老人福祉施設の人員、設備および運営に関する基準」第6条第1項
- 2) 井口昭久：高齢者の終末期の医療およびケアに関する日本老年医学会の「立場表明」、日本老年医学会誌、38、582-586、2001
- 3) 竹迫弥生、田宮菜奈子、梶井英治：介護保険施設における終末期ケア 公表統計データに基づく介護保険施設内死亡者についての検討、プライマリケア29(1)、9-14、2006
- 4) 医療経済研究機構：特別養護老人ホームにおける終末期の医療・介護に関する調査研究 平成14年度調査・研究実績、<http://www.ihep.jp/research/hl4-5.htm>
- 5) 流石ゆり子、牛田貴子、亀山直子ほか：高齢者の終末期 (end-of-life) のケアに関する研究 (Part1) —山梨県内の介護保険施設利用高齢者に関わる看護職の取り組みと課題— 平成16年度山梨県立看護大学共同研究費助成研究成果報告書、1-36、2005
- 6) 厚生労働省：介護保険制度改革の概要 —介護保険法改正と介護報酬改定—、1-27、2006.3
- 7) 全国社会福祉協議会、全国社会福祉施設経営者協議会：改正介護保険対応『指定介護老人福祉施設における看取りに関する指針の策定にあたって (全国経営協版)』、1-24、2006
- 8) 5) と同様
- 9) 松岡広子、濱畑章子：介護老人保健施設の長期入所者が家庭復帰よりも施設生活の継続を望むまでの過程、Quality Nursing、10(7)、53-63、2004
- 10) 原祥子、沼本教子：老いを生きる人のライフストーリー —介護老人保健施設における自己の人生の意味づけ、老年看護学、8(2)、35-43、2004
- 11) 松岡広子：高齢者施設における入所者の生活の受容に関する質的研究 —入所者の安心と不安からの分析—、高齢者のケアと行動科学、9(2)、22-30、2004
- 12) 2) と同様
- 13) 流石ゆり子、牛田貴子、藤巻尚美ほか：高齢者の終末

- 期 (end-of-life) のケアに関する研究 (Part II) — 介護老人福祉施設で生活する後期高齢者の安心と不足の分析から— 平成17年度山梨県立看護大学共同研究費助成研究成果報告書、1-34、2006
- 14) 水野節夫：事例分析への挑戦、東信堂、2000
 - 15) ホロウェイ+ウィーラー著、野口美和子監訳：ナースのための質的研究入門 第2版、医学書院、2005
 - 16) 岡本秀昭、岡田進一：施設入所高齢者と職員との間の主観的ニーズに関する認識の違い、日本公衆衛生学会誌、49(9)、911-920、2002
 - 17) 坂田三允編：日本人の生活と看護 日本人の死生観、40-42、1998
 - 18) 流石ゆり子、牛田貴子、亀山直子ほか：高齢者の終末期 (end-of-life) のケアに関する看護職の悩み・困難 介護保険施設での調査から、第2回日本虐待防止学会抄録集、41、2005
 - 19) 志村ゆず編：ライフレビューブック、高齢者の語りの本作り、55-59、弘文堂、2005
 - 20) 高山直子、三重野英子：介護老人福祉施設の看護師が行うend-of-life Careの実際、老年看護学、10(1)、62-68、2005
 - 21) 牛田貴子、流石ゆり子、亀山直子ほか：Y県下の介護保険施設に勤務する看護職が捉えた終末期 (end-of-life) における意思決定の現状、山梨県立大学看護学部紀要、8、9-15、2006

How the Elderly People Aged 75 and Over Living in a Nursing Home Prepare Their Death Reception

USHIDA Takako, FUJIMAKI Takami, SASUGA Yuriko

The purpose of this investigation is to search what it means waiting death reception" expressed usually by the elderly people aged 75 and over living, as the last dwelling, in a Nursing Home. Interviews were given the 13 elderly people aged 75 and over with consent of this investigation. Choosing 45 parts centered in words indicated death by verbatim theory, a summation and a relation were put in order. Therefore, the following 7 groups were picked up; "the daily mental attitude of waiting for death reception", "A foundation to reach the mental attitude of waiting for reception for death", "expecting of their family", "cherishing the self", "being concerned for others", "forfeiture of self-respect" and, "reposition it in a life cycle". Story lines, "waiting for death reception" of the elderly people's making decision about receiving death in facilities, were drawn. It was suggested that how to live, with making actual condition significant, affects the way to wait for death reception.

Key words : end-of-life, death reception, preparation of death, elderly people aged 75 and over, a nursing home